No.342　2022.11

十勝教育研究

巻頭言
十勝教育研究所運営委員会
委員長
菅野　勇次

教育現場への期待
NPO法人教育支援協会北海道
代表理事
榎本　尚世





わたしの授業実践
清水町立清水中学校
教　諭
村上　陽子

わたしの学級経営
更別村立更別小学校
教　諭
辻　浩一郎

共に学び共に育つ
音更町立柳町小学校
教　諭
小沼　季文

健やかな心と体
本別町立勇足中学校
養護教諭
川村麻美子

研究所めぐり
豊頃町教育研究所
所　長
須藤　正博

日々徒然
鹿追町立鹿追小学校
教　諭
長屋　裕美



日々徒然
幕別町立札内中学校
教　諭
富谷　千城

ＩＣＴの効果的な活用方法

～校務効率化を目指して～

特集

巻頭言

教育改革のその先に見えるもの

十勝教育研究所運営委員会
委員長
菅野　勇次
（幕別町教育委員会　教育長）



実りの秋を経て、各学校では上半期の「我が校」の教育成果の確認とともに、新たな改善プラン等を推進しているところでしょうか。依然として出口の見えないコロナ禍の中で、日々、確かな歩みを進めておられる現場の先生方の熱意と誠意に、改めて感謝を申し上げます。

現行学習指導要領による教育課程の実施については、「令和の日本型学校教育」の具現という形で更なる歩みが始まりました。それに加えて、ＧＩＧＡスクール構想や働き方改革といった教育改革の流れも、コロナ禍によるリモート授業の必要性や日常業務の見直しといった、学校の新しい日常生活の到来によって更に加速したようにも思えます。

さて、今年６月、内閣府総合科学技術・イノベーション会議が「Society5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ（案）」を示しました。このパッケージには、「社会構造と子供たちを取り巻く環境の変化に対応して教育と人材育成をどのように推進するか」という課題の解決を目指し、３つの政策と、その実現に向けたロードマップが掲げられています。

具体的な内容を見ていくと、

① 学習指導要領の次期改訂を見据えた、教育課程の在り方の見直し

② 教師の専門性や基礎的資質の更なる向上を図るための、教員免許制度・教員養成改革

③ 学校の役割、教職員配置や勤務の在り方の見直し

④ 子供の状況に応じた多様な学びの場の確保

⑤ 探究的な学びの成果などを測るための新たな評価手法の開発

⑥ 最先端テクノロジーを駆使した地方における新たな学び方のモデルを創出

⑦ 子供の学びの多様化に柔軟に対応できる学校環境への転換

⑧ 小学校の理数の専科指導の充実

⑨ 突出した能力等を有する小中学生の大学や企業等での受け入れの拡充

⑩ 保護者や学校、社会によるジェンダーバイアスの排除

⑪ 実社会に繋がる学びの充実

など、現行学習指導要領の内部で、あるいは現在の学校現場の実践を通して、検証と試行を求められるものも多数あります。

ロードマップでは、このパッケージは２０２７年度を目途に実現を目指しています。右記の③に関わっては、今年８月から「教員の勤務実態調査」が実施されており、２０２３年度中にその結果が公表されるとのことです。また、「ＰＩＳＡ２０２２」は数学的リテラシーを、「ＰＩＳＡ２０２５」が科学的リテラシーを中心分野に実施されます。

まさに、新時代の人材育成を中核に据え、その対象である子どもの実態とその最大の教育環境である教員の勤務実態の解明を通して、我が国の目指す未来社会の創造に向けた歩みが始まったといえます。この間、各学校に求められてきた「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実と、その環境づくりともいえる「学校における働き方改革」についても、ここまで述べてきたような文脈の中で捉え直すことで、その意味もより明確になると考えます。

そして、このような時だからこそ、十勝教育研究所が今日までの調査・研究から得た情報は、各学校の実践を支える貴重な果実になるのではないかと考えます。

各学校現場の先生方には、「令和の日本型学校教育」の具現等に向けて、時宜を得た研修を通した資質の向上をお願いすることはもちろんですが、併せて、一人一人の実践や各学校の授業改善等に十勝教育研究所のこれまでの研究成果を大いに役立てていただくことを期待しております。

十勝教育研究

No.342
November 2022

特集

ＩＣＴの効果的な活用方法
～校務効率化を目指して～

CONTENTS

◇巻頭言
教育改革のその先に見えるもの
十勝教育研究所運営委員会
委員長　菅野　勇次　1

◆目次　1

◆教育現場への期待
ＮＰＯ法人　教育支援協会北海道
代表理事　榎本　尚世　2

◆特集　ＩＣＴの効果的な活用方法
～校務効率化を目指して～　4

◆連載　わたしの授業実践
～体験から学び
生活に生かせる授業づくり～
清水町立清水中学校
教諭　村上　陽子　14

◆連載　わたしの学級経営
～「行きたいと思えるクラス」をつくる～
更別村立更別小学校
教諭　辻　浩一郎　16

◆連載　共に学び共に育つ
～子どもとの関わりから学び、
共に成長していく～
音更町立柳町小学校
教諭　小沼　季文　18

◆連載　健やかな心と体
～ＩＣＴを活用した健康調査～
本別町立勇足中学校
養護教諭　川村麻美子　19

◆研究所めぐり
～「報徳のおしえ」を礎とした未来を
創造する子どもたちの育成を目指して～
豊頃町教育研究所
所長　須藤　正博　20

◆教育情報
共同研究・協力員研究　22
研修会報告　28
研究発表大会案内・数字で見る十勝の教育　29

◆編集後記　30

◇日々徒然
日本の当たり前がペルーでは…
鹿追町立鹿追小学校
教諭　長屋　裕美

人との出会いと分岐点
幕別町立札内中学校
教諭　富谷　千城

◇学校めぐり
広尾町立広尾中学校
校長　伊澤　理紀



NPO法人　教育支援協会北海道
代表理事　榎本　尚世さん

教育支援協会は、日本の将来を担う子どもたちの健全育成と、そのために必要な教育改革の実現を目的とした教育分野最初の全国組織のNPO法人である。帯広市が本部の教育支援協会北海道は、自助努力・相互扶助・共生自立を重んじ、「万人は一人のために、一人は万人のために」を基本精神とし、小学校英語活動サポート事業や、「放課後子ども教室」「放課後イングリッシュ」等を行っている。また、昨年10月から、音更町教育支援センター「ふれあい柳町教室ほっと」を委託運営している。

今回は、教育支援協会北海道の代表理事として活動している榎本尚世さんに、子どもたちとの関わりを通して感じていることや、教育現場に期待することについて話を伺った。

まず、仕事をする上で大切にされていることは何かと伺うと、「ピラミッド型組織ではなく、職場内の全員が対等な関係で仕事をする組織でありたいと思っています。イメージは円です。仕事内容によって円の中心となる人物が変わり、周りの人は中心となる人をサポートする。私自身、代表理事という立場ではありますが、得意なこともあれば苦手なこともあります。得意なことは率先して行い、苦手なことは同僚の方にサポートしていただいています。適材適所で自分の得意なことを生かすことで、みんなが気持ちよくいられる職場環境になると思います」と榎本さんは語る。

また、子どもたちとの関わりを通して感じていることを伺った。

「自己肯定感が低い子が多いことに驚いています。自分には得意なことがない、誰からも認められないといったネガティブ思考の子が多いと感じています。また、過度に間違うことを恐れたり、失敗することを嫌がったりする傾向があります。私は、『間違ってもいい、失敗してもいい。自分が得意なことを伸ばしていくことが大切だ』と

周りの大人が子どもの頑張りを認めることで、子どもたちの自己肯定感が高まっていく。

思っています。子どもたちには、『みんな得意・不得意があるから、自分の苦手なことを無理にする必要はない。自分が苦手なことでも、それを得意にしている人がいるのだから、お互いが助け合えばいい』と伝えています。

もちろん、嫌なことや苦手なことから逃げてばかりではいられません。それを乗り越える力も必要です。様々なことにチャレンジしてみて、途中でやめることがあってもいい。その中で、一つでもいいから『最後までやり切った』という経験があれば、その子の自信になります。

また、『ふれあい柳町教室ほっと』には、様々な理由で不登校になった子が来ています。そのため、人と触れ合うことや話すことを通して、心を元気にすることを一番に考えています。基本的には、その子がやりたいことをできるようにしていますが、様々な年齢層の子どもが一つの場所で生活するので、お互いの折り合いをつけなければいけません。その中で、周りのことを考えることができるようになったり、互いを理解し合うことができたりします。他には、教室内のルールづくりなどを子どもたちで話し合う『ほっと会議』を開いています。自分たちで決めたことがみんなのためになるという経験が、心を元気にし、自己肯定感につながると思っています」

最後に、先生方に対して、

「先生自身が『完璧でなければならない』と思い過ぎないようにしてほしいです。先生が間違い失敗する姿を見せることで、子どもたちもチャレンジする気持ちが生まれると思います。

また、『あなたの得意なこと、頑張っていることを見ているよ』と子どもたちに伝えてください。周りの大人が認めることで、子どもたちはプラスの経験を積み重ねていきます。困難を乗り越える力、ピンチをチャンスに変える力は、心の強さです。踏み出すタイミングは一人一人違うので、その子のタイミングに合わせて、背中を押してあげてほしいです」

という思いを語ってくださった。







上：英語の楽しさを伝える榎本さん　　右：放課後イングリッシュのハロウィンパーティの様子

下：外国語のコミュニケーション活動の一場面

教育支援協会北海道では、「多様な学び」「継続的な学び」を目指し、オンラインでの英語学習も実施している。

ＮＰＯ法人　教育支援協会北海道

問合せ先

◆　電話　　0155-66-7120

◆　e-mail　info@kyoikushien-h.com

◆　ＨＰ　　http://kyoikushien-h.com

特　集

ICTの効果的な活用方法
～校務効率化を目指して～

学校現場における教職員の業務実態と改善例　P.４～７
北海道独自の効果的なＩＣＴを活用した取組　P.８～９
グループウェア活用法とメリット・実践例　P.１０～１１
「ネットワーク」と「フットワーク」で進める音更町のＧＩＧＡスクール構想　P.１２～１３

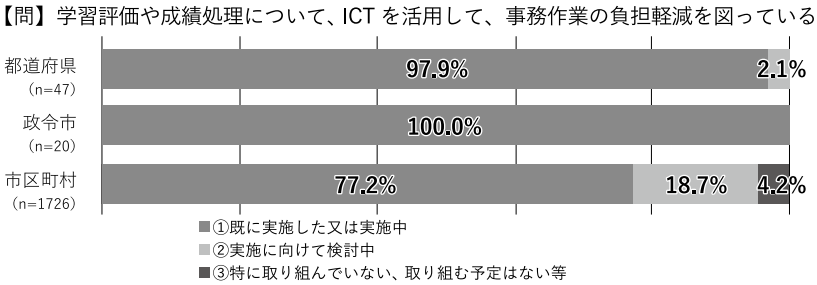
◆学校現場における教職員の業務実態と改善例

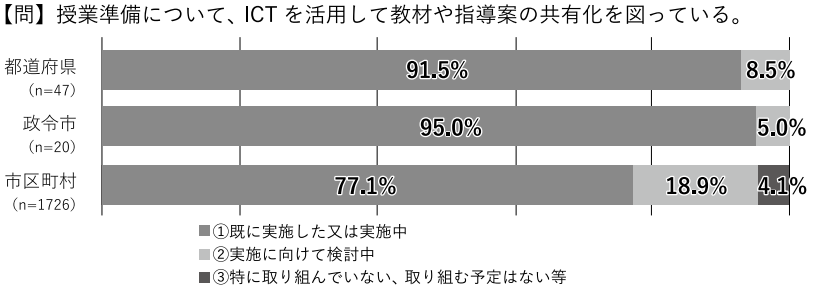
平成26年度に文部科学省が実施した「教職員の業務実態調査」では、教職員の業務の従事や負担感の状況などを中心に、調査が実施されました。

それによると、業務の改善には「ＩＣＴの導入」「事務の共同実施」「事務職員との役割分担」「地域人材の活用」「プロセス見直し・業務改善」「廃止を含む業務精選」「業務の外部委託」など業務の種類に応じて様々な手立てを組み合わせて改善を講じられています。また、小学校、中学校の別を問わず、「ＩＣＴの導入」による改善を行なっている学校が多いことが分かります。ＩＣＴが導入されている主な業務としては、「成績一覧表・通知表の作成、指導要録の作成」、「学期末の成績・統計・評定処理」、「児童生徒の在籍管理（名簿の作成、出席簿の記入、月末統計）」などが挙げられています。

また、令和３年度の「教育委員会における学校の働き方改革のための取組状況調査」では、都道府県・政令市では９割以上、市町村では約８割の自治体がＩＣＴを活用した校務効率化に取り組んでいることも明らかとなっています。

ＧＩＧＡスクール構想に伴い一人一台端末の体制が整ったことを好機と捉え、文部科学省が発信している情報を参考にＩＣＴの活用が業務改善にどのような変化をもたらすのか。また、各自の端末を活用した会議のペーパーレス化の実践例。そして、欠席連絡や配布物、保護者面談の予約をデジタル化するなど、大幅な校務の効率化に加えて家庭との確実な連絡・連携が実現した事例など、ＩＣＴの効果的な活用について紹介します。





令和３年度　教育委員会における学校の働き方改革のための取組状況調査

ICT活用前後の業務改善につながる変化



ケース1

Before

◎ 業務へのタブレット利用に苦手意識をもつ教職員が多数

業務においてＩＣＴを積極的に取り入れることに苦手意識や抵抗感をもった教職員が多かった。また、アプリの使い方やそのメリットについて聞く時間もなく、活用できていなかった。

After

☑やったこと
- ＩＣＴ担当による実践と研修

☑ポイント
- 通信の発行による事例共有
- 全員参加の研修を実施
- うまく進んだ事例の共有

◎ ＩＣＴ担当の積極的サポートでタブレット利用者が増加

「やってみたら意外にできた」「使ってみると便利で効率的」といった声が多数聞かれた。アプリを使えるようになった教職員が他の教職員に教える場面も増えてきた。

ケース2

Before

◎ アンケートは紙で回収、結果を直接入力する手間

子ども向けや、教職員向けの各種アンケートは紙で配布・回収し、結果はパソコンに入力。配布時に不在の子どもや紙をなくしてしまった子どもへの対応にも時間がかかっていた。

After

☑やったこと
- アンケート作成ツールの使用

☑ポイント
- 子どもは端末を利用してアンケートに回答
- 教職員は、アンケートの集計結果や個人の回答も共有

◎ アンケート作成ツールを使って作成の手間が減少

ツールを使ってアンケートを発信し、回答を集めることで、データを自動的に集計。自分のチームやクラスルームに投稿することで、以前のような子どもへの対応の手間が減った。

ケース3

Before

◎ 教職員同士の連絡事項は口頭やメモで伝達

保護者からの連絡や学校行事の連絡など、共有しなければならない事項については、担当者に口頭またはメモで伝え、内容によっては文書を用意して伝達していた。

After

☑やったこと
- 「お知らせ」機能で連絡

☑ポイント
- 回答期限がある場合は特定のユーザー宛てに投稿する
- 内容を確認したらスタンプやコメントを返すなどのルール化

◎ タブレット上で連絡事項を確認できるよう作業の流れを整備

直接話をしたりメモや文書を渡したりできない教職員にも連絡が容易にできるようになった。また、履歴が残るので、回答期限がある連絡がなおざりにならなくなった。



◇職員会議における会議資料のペーパーレス化

学校は紙媒体による情報の伝達・管理を行ってきましたが、書類の保管場所には苦労することも少なくありません。また、すぐに必要な資料を取り出すことができないこともあるため、情報の管理が煩雑になってしまいがちです。そのような時に、ＧＩＧＡスクール構想が全国で一斉にスタートし、一人一台端末が学校に整備されました。しかし、授業中に端末を活用することは増えてきましたが、現場での校務効率化にはあまり活用されていませんでした。

そんな中、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、在宅勤務等になった場合でも業務が普段通り遂行できるようにと考え、ペーパーレス化に取り組む学校が増えてきました。

Q ペーパーレス化に取り組んだ背景を教えてください。



A



事務補

紙の書類の印刷や配布に手間がかかっていました。また、資料修正時の再配布は紙資源の無駄使いだと感じていました。



教頭先生

端末の資料共有機能が使いやすかったのでペーパーレス化が進む要因となりました。

Q ペーパーレス化にしてみての感想を教えてください。



A



先生

会議資料の保管場所で悩むことがなくなり、机の上がスッキリしました。



先生

ＰＤＦにすると、検索機能が使えて必要な資料を探すのに便利になりました。

ペーパーレス化が進むと紙の資料を大量に印刷する手間が省けるため、余裕をもって会議資料を準備することが可能です。また、資料は自分の都合のいいときに後からじっくりと見直すことができるので、必要なものだけを印刷することができるようになります。

これまでは、配布された会議資料を個人でファイリングする必要がありました。ペーパーレス化を実施し、電子ファイルの保管ルールを組織全体で共有することで、必要な会議資料だけを後から探しやすくすることができます。

個人情報等の取扱いは年々厳しいものになっています。ペーパーレス化を推進することによって閲覧範囲を指定するだけではなく、パスワードを設定することもできます。誰の目にも触れやすい紙媒体の形で内外に流通するより、リスクは低減されるのではないでしょうか。

Q ペーパーレス化に不安な点はありませんでしたか。



A



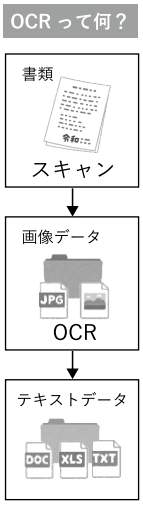
先生

メモができる紙の資料の方が使いやすいと感じていましたが、無料のアプリでデータに手書きができるようになり、不便を感じなくなりました。



先生

手書きしたものを、テキスト化して検索可能にするＯＣＲ技術（光学文字認識）も精度が上がって便利です。





会議のペーパーレス化といっても、紙を全面的に廃止したわけではありません。

紙媒体に適した資料	データ化に適した資料
○議論したい資料 ○書き込む資料 ○持ち運ぶ資料	○連絡事項 ○大量の資料 ○毎年行う行事等 ○オンライン会議の資料



ペーパーレス化だけが目的ではなく、あくまでも業務の効率化が目的ということですね。

◇欠席連絡等の保護者との連絡手段のデジタル化

新型コロナウイルス感染症の影響もあり、出欠の連絡や子どもの健康状態の把握等、保護者との確実な連絡・連携が欠かせなくなりました。朝の忙しい時間帯に、職員室の電話に保護者から連絡が来た場合、電話を受けた先生が担任の先生に口頭や手書きのメモで伝えているという現状もあります。

そこで、町内で共通の連絡アプリを用い、連絡手段をデジタル化するなど、保護者に欠席連絡をしてもらうようにする学校も増えてきました。教室にいながら子どもの欠席連絡を受け取ることができるようになり、職員室で待機する必要がなくなります。また、健康観察カードの受取りや、押印などの作業の流れが省略され、業務の効率化にもつながっています。

Q 欠席連絡等はどのように変わりましたか。



A



先生

コロナ禍で登校時間前に欠席連絡が集中することもありましたが、連絡手段のデジタル化によって解消されました。

Q 保護者へのお便り配布のデジタル化等はいかがですか。



A

学校





教頭先生

町内で共通の連絡アプリを活用し、保護者への配布文書をＰＤＦで送ることにしました。また、行事の出欠や保護者面談の予約もスマホでできるようにしています。

また、学校からの連絡を確実に保護者に伝達できるようになりました。過去の連絡をいつでも閲覧できるため、学校への問合せが減りました。

家庭





保護者

紙での配布だと子どもが紛失してしまうことがあります。また、配布された文書や資料をファイリングするのが大変でした。今は、データ配信になって、出先で学校行事や持ち物などを確認できるため便利です。

さらに面談の予約も電話から予約フォームに変わり、気を使うことなく予約ができます。学校に連絡することの敷居が低くなりました。

Q 勤務時間外の問合せもデジタル化したそうですね。



A



教頭先生

17時以降に電話がかかってくることが大幅に減りました。先生方は教材研究に集中できるため、早く帰れるようになりました。

休日や平日の勤務時間外に来る保護者からの緊急の連絡は「連絡用フォーム」を活用します。「連絡用フォーム」に緊急の連絡があると、管理職にメールが届くように設定することが可能です。情報の一元化を行うことで連絡ミスを減らすことができるようになります。

Q 実際に使ってみた先生方の反応はいかがですか。



A



養護教諭

朝の忙しい時間帯に電話の応対がなくなったことで、時間的なゆとりが生まれました。毎日の健康観察もデータとして蓄積できて便利です。

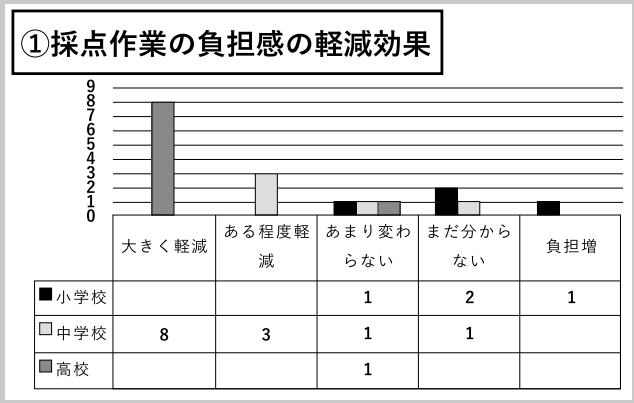
朝の検温状況や咳、腹痛などの症状の具合も、子どもが入室する前に確認できます。そのため、体調不良の子どもがいても、事前の準備に慌てずに対応できるようになり、家庭との確実な連絡・連携につながります。

※「令和３年度　教育委員会における学校の働き方改革のための取組状況調査」を基に作成

ＩＣＴを活用した取組

北海道教育委員会　学校における働き方改革の推進に向けた教員の業務支援ソリューションの実証研究事業

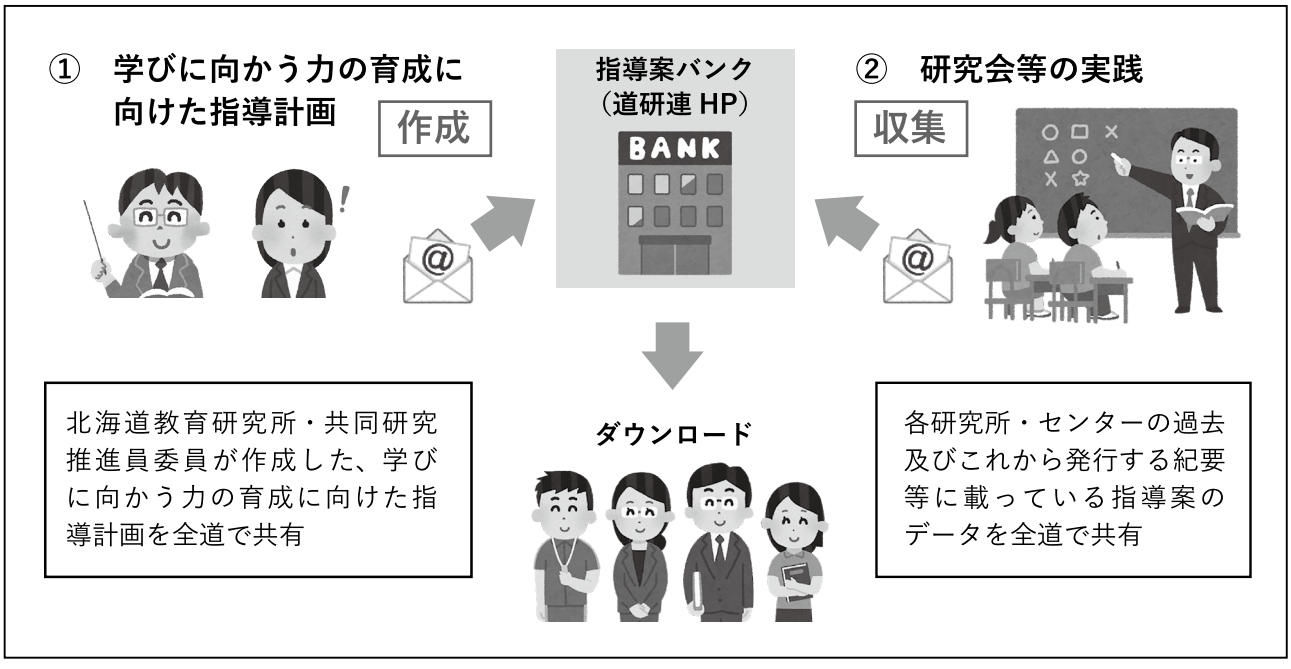
働き方改革推進事業の推進校へ、開発中のデジタル採点システムを試行導入し、当該システムの活用による業務時間の縮減効果や教員の負担感の軽減効果について実証研究が行われています。効果的な活用方法等について好事例を収集し、全道へ発信することで、学校現場における教員業務支援に繋がるＩＣＴの活用促進や新たなソリューションの可能性について検討を行い、実効性のある働き方改革の推進につなげる事業について紹介されています。



デジタル採点システムの試行導入に係る第２回アンケート調査結果（まとめ）より

北海道教育研究所連盟　指導案バンク

「指導案バンク」は、各研究所・センターの過去及びこれから発行する紀要等に載っている指導案のデータを掲載し、全道で好事例を共有するためのウェブページです。また、共同研究推進委員が、学校での実践に基づき、子どもの学びに向かう力の育成を目指した指導計画も掲載されています。



北海道教育研究所連盟 HP「指導案バンク」より

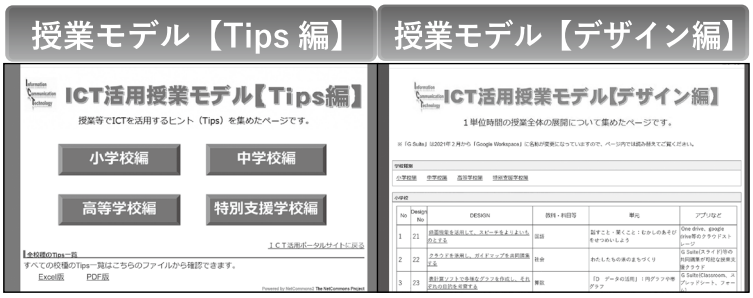
北海道独自の効果的な

北海道教育委員会　ＩＣＴ活用ポータルサイト

ＩＣＴ活用ポータルサイトは、ＩＣＴを活用した教育についての情報を、小学校・中学校・高等学校・特別支援学校等の先生方や保護者の皆様などへ提供するためのウェブページです。

授業モデル

授業等でＩＣＴを活用する取組やＩＣＴを活用した１単位時間の授業の流れが、校種や教科別に掲載されています。自分の教科や単元で使ってみたい実践を見付けることができるかもしれません。



ＩＣＴ活用「みんなで研修」プログラム

ＩＣＴの活用に関わるトピックスについて、10 分から 25 分程度の動画や動画で使用されているスライドが資料としてアップされています。

現在は「Ｉ期プログラム」として、「ＩＣＴを活用した授業改善」「プログラミング教育の充実に向けて」「特別支援教育におけるＩＣＴ」など、実践につながるコンテンツになっています。

この他にも、「ＩＣＴ活用『いつでも研修』プログラム」では、Google Classroom や Google Jamboard の操作方法などについて、動画とスライド資料で研修することができます。

どちらも、個人研修のみならず、校内研修にも活用できます。







【スライドの一部】

【動画のイメージ】



GIGA ワールド通信

全道の学校においてＩＣＴを効果的に活用した教育活動が実施されるよう、ＩＣＴに関する情報を集めた広報誌「GIGA ワールド通信」が発行されています。各学校にもメールにて送付されていますが、ここでは全てのバックナンバーを確認することができます。

ＩＣＴに関する概要や関連リンクの紹介だけでなく、道内各地での実践的な事例や取組が数多く紹介されています。

グループウェア活用法とメリット

グループウェアとは、組織内でのスムーズな情報共有やコミュニケーションを実現し、業務効率を上げるツールの総称です。グループで業務を円滑に進めるための様々な機能が、1つのシステムに統合されています。

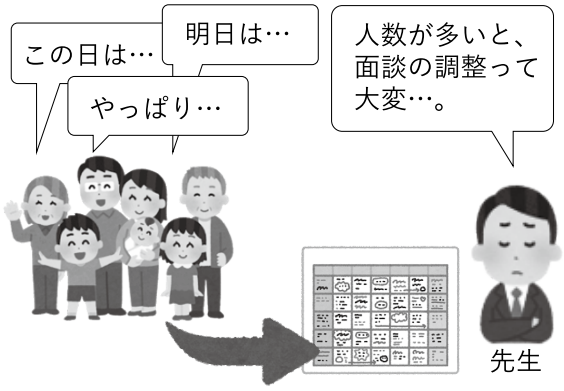
主な機能として、チャット機能はメッセージのやり取りがリアルタイムで行うことができるため、業務連絡などがメールより手軽で簡単な連絡手段として利用できます。お知らせ掲示板機能は学校全体に事務的な業務連絡をお知らせするツールとして有効です。

また、デジタル化が進む学校では、組織内で画像ファイルやテキストファイルなどを頻繁に取り扱うことから、データの整理や管理が必須になります。これら大量のデータを集約し、ボタン1つで簡単に共有できる資料配布機能や、採点も可能な課題配布機能もグループウェアには備わっています。他にも、グループウェアには、WEB会議機能や、スケジュール管理機能など便利な機能も利用できるようになっています。

グループウェアを活用すると、業務連絡や予定管理・調査などの業務負担を軽減する上で、さまざまなメリットがあります。この機会にぜひ、グループウェアを使って業務改善してみませんか。

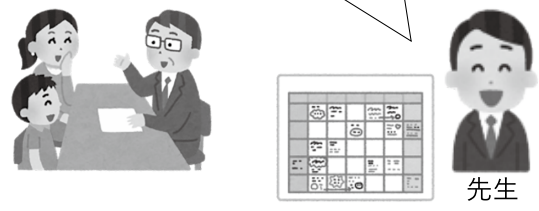
予定管理（面談編）

兄弟がいる家庭の面談は調整が難しい…



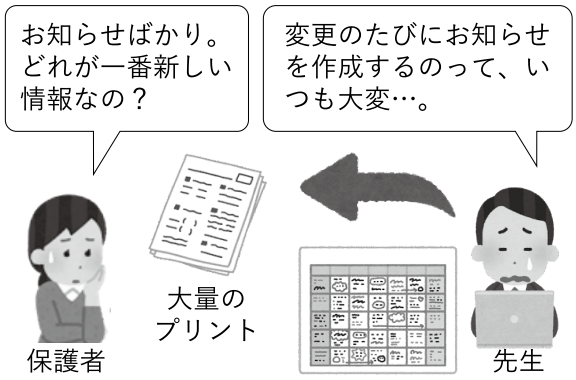
グループウェアを活用すると…

保護者面談の調整が人手を介さずに実現できる



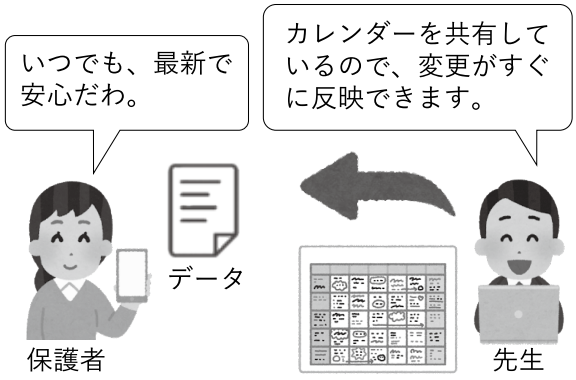
予定管理（行事編）

行事予定を更新するたびに印刷・配付の手間が…



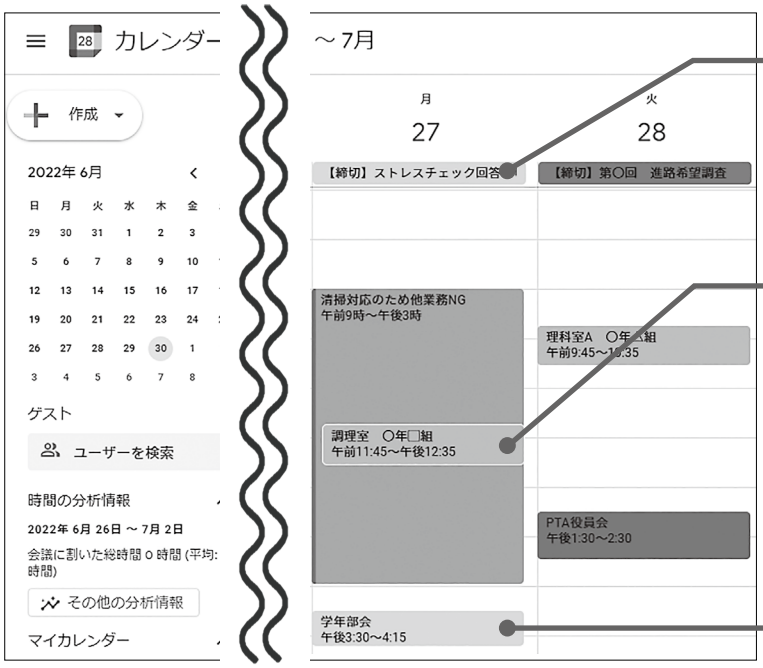
グループウェアを活用すると…

最新の学校行事を常に共有！



グループウェア活用法と実践例

Google カレンダー



◎教師の業務や提出物の締切の共有

業務の優先順位を意識した**効率的な時間の使い方**が可能です。

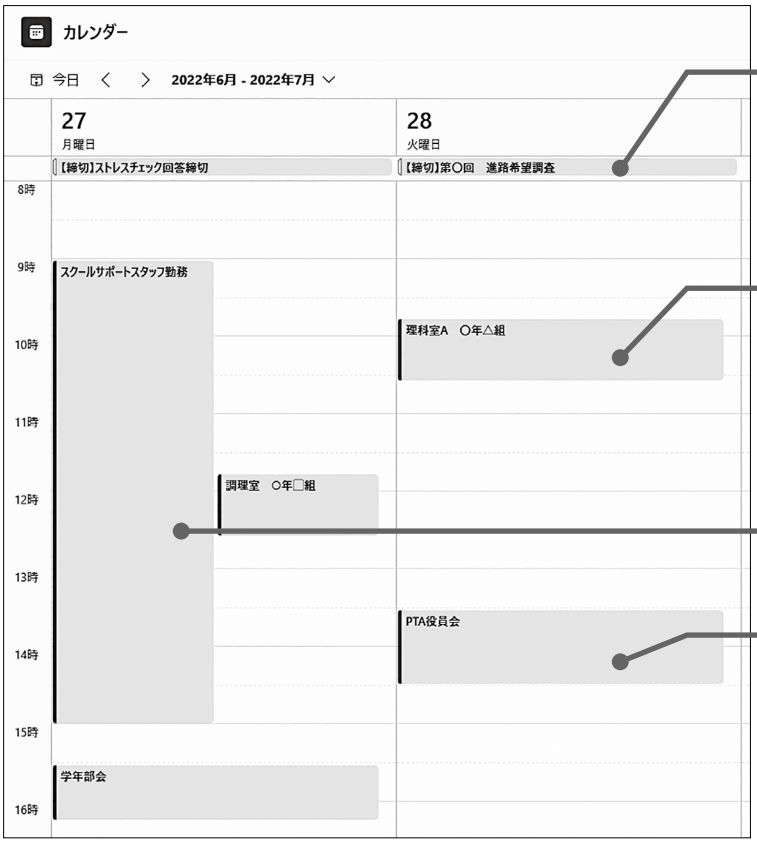
◎空き時間の共有

同僚同士でお互いの**最新予定を確認できる**ようになります。空き時間に教科部会や分掌部会の設定をすることで、**放課後の時間が有意義に使える**ようになります。

◎会議予定や出欠の共有

会議・研修の情報、出欠の共有をカレンダーで行うことで、週や月ごとの予定確認や、**教職員同士の予定の把握が容易に**なります。

Microsoft Teams



◎子どもの提出物の締切の共有

同僚と締切を共有することで**他教科と提出日の重複を避け、子どもの負担を減らす**ことができます。

◎教室や備品の予約管理

使用されていない特別教室の空き状況を確認できます。使用予約を入れることで、**空き教室の把握や備品の調整が容易に**なります。

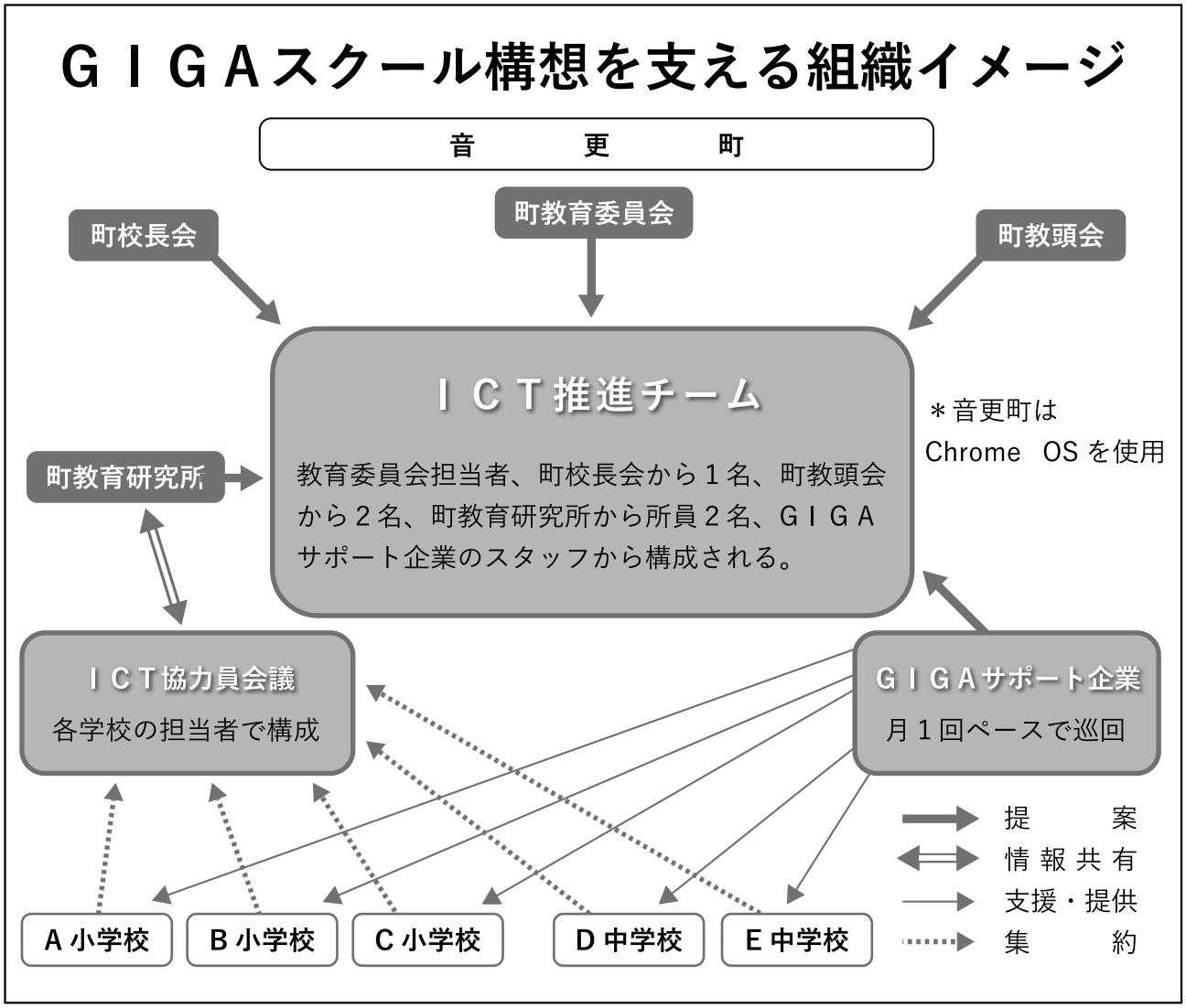
◎支援スタッフの勤務予定の共有

勤務予定を把握することで支援スタッフとの連携が取りやすくなります。

◎保護者向け予定の共有

保護者と行事予定を共有することで、連絡や変更が容易になります。担任は、他の業務に時間を割くことができるようになります。

進める音更町のＧＩＧＡスクール構想



音更町では、ＧＩＧＡスクール構想を町全体でより円滑に進めるため、令和２年 10 月に「ＩＣＴ推進チーム」を立ち上げました。構成メンバーは、町教育委員会の担当者、町校長会から１名、町教頭会から２名、町教育研究所から所員２名、そしてＧＩＧＡサポート企業のスタッフです。町全体の方向性や取組方、各学校から届く課題の解決案を議論しています。

ただ、それでも学校によって情報量や進行状況に差がありました。そこで令和４年度から、町教育研究所のＩＣＴ活用部会で「ＩＣＴ協力員会議」を設置しました。こちらは各学校から担当者１名が参加することで、より具体的な実践交流や課題協議が可能となっています。この「ＩＣＴ推進チーム」と「ＩＣＴ協力員会議」の２つのネットワークによって、町内全ての小・中学校が、町全体の方向性を共有しつつ、各学校の実態に合わせた独自の取組を進めることで、ＧＩＧＡスクール構想実現に向けて取り組んでいます。

また、音更町教育委員会が現場の声に柔軟かつ素早く対応することで、学校現場は積極的にトライ＆エラーを繰り返し、アップデートしながら進むことができます。さらにＧＩＧＡサポート企業が、「ＧＩＧＡスクールサポーター」として各校を月に１回のペースで巡回しており、各校の必要に応じたアドバイスをすることや、他校の情報を提供することもあります。こういったフットワークのよさも、ＧＩＧＡスクール構想を進める大きな支えになっています。

「ネットワーク」と「フットワーク」で

校務活用「ドキュメント」編

音更町立木野東小学校

木野東小学校では、日報をドキュメントで作成して活用しています。日報には、その日の予定や職員動静、各分掌からの連絡事項などが記載されています。より詳細な情報を伝えたい場合は、追加資料データのリンクを貼り付け、共有ドライブなどを介さずにドキュメントデータから確認できるようになっています。また、職員室前方に大型モニターを設置し、その日の日報が常に表示されているので、各自の chromebook を開かなくても、ある程度の情報を確認することができる環境となっています。これらによって、職員室でのペーパーレス化はもちろんのこと、短時間で情報確認・共有ができるようになり、学級担任が教室で子どもたちを出迎える余裕も生まれました。

さらに、音更町で採用している連絡ツールで欠席等の連絡を受け付け、その結果も日報内のリンクから閲覧できます。これによって朝の忙しい時間帯における電話対応の煩雑さが改善されました。

ドキュメントで作成した日報は、昨年度から活用していますが、現状に固執せず必要に応じてアップデートを繰り返し、全職員にとって使いやすい形を模索し続けてます。

令和4年10月7日（金）

＜日程＞定時退勤日

・NPO外国語（5年）
・防災事前学習（4年社会）
・新入児健診派遣
（共栄コミセン ○○、□□）
・保護者面談⑤
・夕打ち（16:15）
・新1年生保護者来校10:00　会議室（授業参観、教育相談　担当：○○、□□）
・6学年レク16:30～19:30（19:00花火）

＜本日の授業時数＞ 週案

1年	2年	3年	4年	5年	6年
5	5	5	5	5	5

＜欠席連絡＞

＜職員動静＞ ＊名前と時間の記入を!

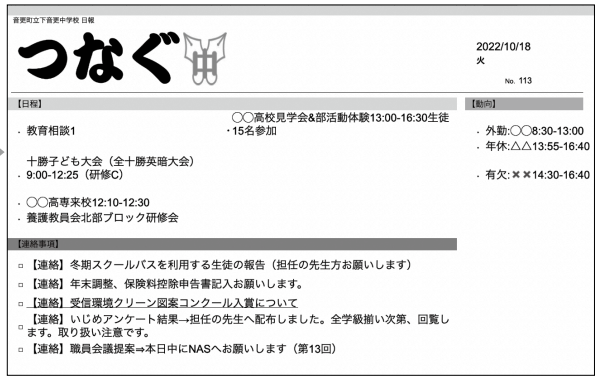
年休　○○10:00～16:45　◇◇9:00～11:00]
△△14:45～
特休
病休
外勤　○○、△△12:30～
有欠　○○11:30～16:30◇◇14:30～16:00
出張　○○（1日）
割振

校務活用「スプレッドシート」編

音更町立下音更中学校

下音更中学校では、スプレッドシートのシート機能とリンク機能を活用し、様々な情報を１つのデータで管理・共有しています。データには、「日程」「連絡事項」「職員の動向」などを入力するシートがあり、それぞれに担当者が必要な情報を入力すると、それらから当日のデータだけが「紙面版」に表示されるようになっています。また追加資料がある場合は、そのリンクを貼り付けておくことで、すぐに確認ができます。教科担任制や部活動など情報が多岐に渡る中学校だからこそ、全教職員が情報を共有できるシステムづくりが必要と感じています。

日付		日程①	日程②	日程③	学校関連	学校関連	学校関連
10月17日	月		３年生球技大会（午前中）グラウンド	生徒総会6校時	高校サッカー部顧問来校 16:30~生徒2名	不登校対策委員会	音更町内中学校校長会議13:30~（音更中）校長
10月18日	火	教育相談1		十勝子ども大会（全十勝英暗大会） 9:00-12:25（研修C）	釧路高専来校 12:10-12:30	養護教員会北部ブロック研修会	
10月19日	水				職員会議⑫	PTA厚生部会19:00~（ミニバレーについて）	女子バスケ部顧問来校 17:00~


音更町立下音更中学校 日報

つなぐ

2022/10/18
火

No. 113

【日程】

・教育相談1
・9:00-12:25（研修C）
・○○高専来校12:10-12:30
・養護教員会北部ブロック研修会

○○高校見学会&部活動体験13:00-16:30生徒
・15名参加

十勝子ども大会（全十勝英暗大会）

【動向】

・外勤:○○8:30-13:00
・年休:△△13:55-16:40
・有欠:✕✕14:30-16:40

【連絡事項】

□【連絡】冬期スクールバスを利用する生徒の報告（担任の先生方お願いします）
□【連絡】年末調整、保険料控除申告書記入お願いします。
□【連絡】受信環境クリーン図案コンクール入賞について
□【連絡】いじめアンケート結果→担任の先生へ配布しました。全学級揃い次第、回覧します。取り扱い注意です。
□【連絡】職員会議提案⇒本日中にNASへお願いします（第13回）

わたしの
授業実践

～体験から学び 生活に生かせる授業づくり～



清水町立清水中学校
教諭　村上陽子

■はじめに

子どもたちの生活能力の低下や経験不足が叫ばれるようになって久しくなります。そのため、日頃から「家庭・地域・社会」という空間軸と「現在・過去・未来」という時間軸のつながりを大切にした家庭科授業の構築を心掛けています。

体験したことを子どもたちの生活にどのようにつなげるか、日々、試行錯誤しながら教材研究に取り組んでいます。その一端をご紹介します。

■「こつ」を教えて「できた！」を体感する

裁縫の基本である玉結びや玉どめなどは小学校の既習事項ですが、日常生活での経験が少ないせいか、身に付いていないことが多いようです。

そのため、衣生活の「補修（裁縫）」の学習では、苦手な子どもたちが毎年9割近くいます。基本なくして、応用はあり得ません。「できないから、やりたくない！」の意識を「やってみよう！」に変えたい私にとっては、いつも奮起する学習です。

こつをつかめば簡単にできることは、たくさんあります。例えば、糸通しのこつも書画カメラを使って丁寧に教えます。①糸は斜めにカットする。②針孔は自分に向ける。③糸先を5㎜以下にして短く持つ。④肘、または手首を机に固定して針孔をよく見ながら糸を通す。こつをつかむと高い確率で針に糸が簡単に通せます。「できた！」の声が子どもたちから聞こえ始めれば、しめたものです。一つできれば、学級全体が「次もやってみよう」という雰囲気になるので、玉結びや玉どめのこつを説明するときも、誰もよそ見をせず真剣に聞くようになります。子どもはできるようになりたいので、分からないときには周りに聞いて、教え合いが始まります。そうすると、できるようになる子どもが増えていきます。

僅かな時間でも、基本の復習をすることで自信を付けた子どもたちは、意欲的に次の補修の技術を身に付けたり、ブックカバー作りに取り組んだりするようになります。更に自信を付けた子どもは、主体的に自分の身の回りの物も補修するようになります。

「できないから、やりたくない！」の意識を「やってみよう！」に変えたい。





■学んだことを家庭で実践する

長期休業中の課題として、食生活の「献立づくり」では一食分の栄養バランスが取れた食事作りを、衣生活の「日常着の手入れと保管」では家族全員の衣類を3日間洗濯することを家庭で実践し、レポートにまとめることにしています。学習した内容を実践することが大事な教科なので、「生活の基盤である家庭で実践してほしい」という思いから、ご家庭の協力を得て、こうした機会を設けています。

ご家庭の状況も様々なので賛否両論があるところですが、レポートの保護者欄に「なかなか教えてあげられなかったので、よい機会になった」というコメントを頂くことが多く、この課題が家庭の中で親子が関わる時間にもなっていると感じます。

子どもにとっても、家庭で実践することで家族の苦労が分かったり、喜んでもらえたりします。家族の一員としての役割を果たすことで、自立に向けて主体的に取り組むきっかけになっているようです。

■専門家から学び、理解を深める

学習指導要領では、少子高齢社会の進展に対応して、高齢者との協働や関わり方の学習内容が加わりましたが、核家族化により、高齢者と共に生活している子どもは少数です。そのため、高齢者に対する理解が深まるよう、3年生の総合的な学習の時間に学習する「人権・福祉」と関連付けて家庭科の単元を構成することで、時数を有効に活用しています。

総合的な学習の時間に町内の介護福祉士のご協力を得て、「高齢者疑似体験・介助体験」を実施しています。子どもたちは高齢者の身体的特徴を学んだり、高齢者の介助の仕方を体験したりしました。その後、高齢者施設の方のご協力の下、「認知症サポーター養成講座」を受講しました。この学習は、高齢者に多いと言われる認知症について学んだ後に、家庭科で「高齢者とのかかわり」という単元で高齢者施設の方をゲストティーチャーとして招きました。高齢者施設の方には、指導案の作成段階から相談させていただき、自分事として考えられるように「物盗られ妄想のある高齢者に家族がどのように関わるか」という課題を設定し、グループごとにロールプレイングを通して課題解決を図りました。子どもたちは恥ずかしがりながらも、既習事項や体験から得た知識を活用して高齢者との関わり方に対する考えを深めていました。各グループの発表後に、ゲストティーチャーからアドバイスをいただいたことで、「自分が将来直面するかもしれない現実」として捉え、多くの子どもがこの学習を将来に生かしたいと考えていました。

指導案の作成から専門家の知恵を拝借することで、より子どもの理解が深まる学習になったと感じています。

■おわりに

家庭科は、少ない時数の中でも体験的に学ばせたい学習が多岐に渡り、どのように授業づくりをするかが悩みどころです。

デジタル化が進む中で、子どもたちの日常体験を学習の中にどのように組み入れるかを念頭に置き、目の前の子どもたちの生活をしっかりと捉えながら、将来一人の生活者として自立していく力を身に付けることができるよう、更に授業の工夫改善を図りたいと思います。

将来、一人の生活者として自立していく力を身に付ける。



わたしの学級経営

～「行きたいと思えるクラス」をつくる～

更別村立更別小学校
教諭　辻　浩一郎

■はじめに

このお話を頂いたとき、正直なところ、引き受けるかどうか迷いました。それは、ここに書くような何かをやっているわけではないからです。それでも、日々悩み苦しんでいる先生方に、「こんな考え方なら私でもできる！」と何かのヒントになるのなら、と書いてみることにしました。

■目指す子どもの姿

最近は、打たれ弱く自分に自信がもてない子をよく目にします。中には、様々な原因から不登校になってしまう子も。そんな子どもたちもいずれは一人で生き、人と関わって生活していかなくてはいけません。そのために教師ができることは、子どもたちを自立へと導くことです。様々な経験を通して、たくましく生きるためのスキルを身に付け、困難を乗り越えて、幸せな人生を送る力を育てることを私は目指しています。その力を育てるためには、まずは学校に来てもらうこと。「じゃあ、『行きたいと思えるクラス』って？」と考えることからスタートしています。

■学級経営で大切にしている柱

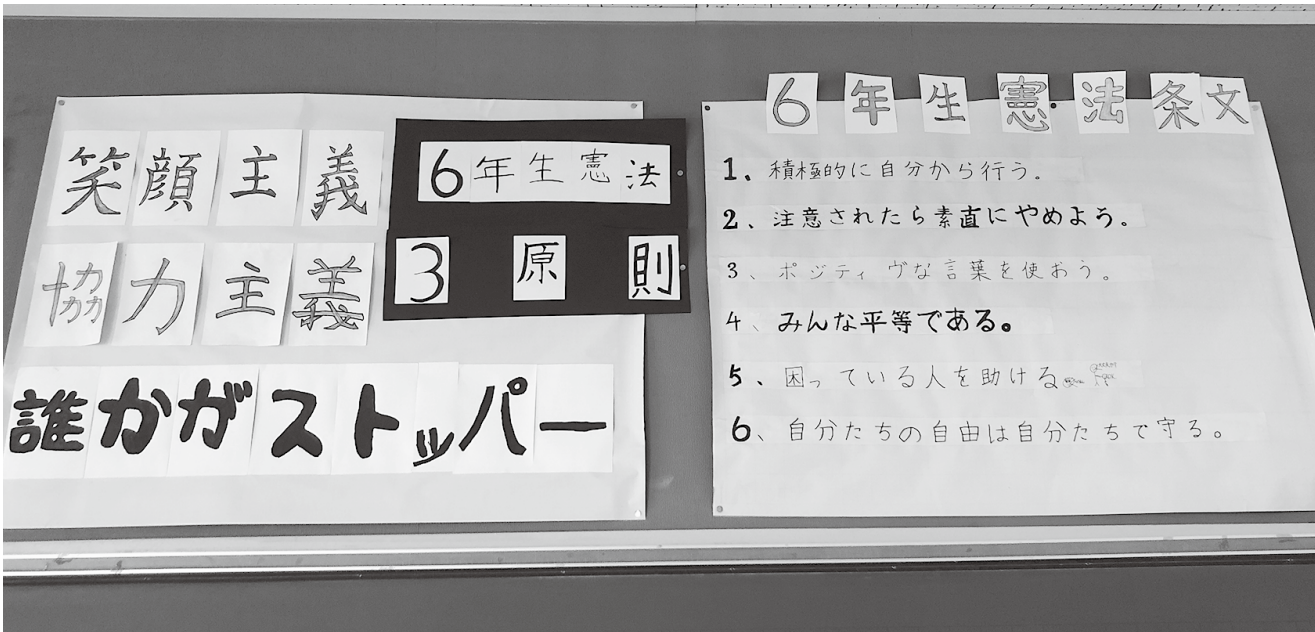
まずは、教師が楽しみ、たくさん笑うことです。一日の大半を過ごす教室が楽しい場所ではなかったら、子どもたちにとっても通いたい場所であるはずがありません。教師が笑うことが、「楽しく笑顔あふれるクラス」の第一歩になると考えています。時々、自らへの戒めの意味も込め、「我が子をこのクラスに通わせたいか」と、自身の言動についても反省します。

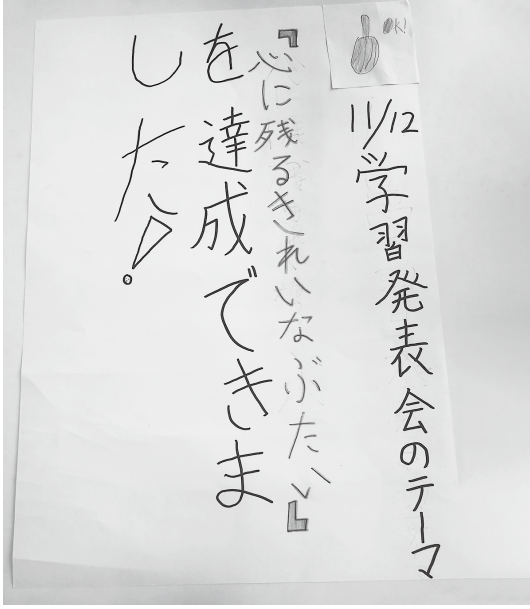
まずは、教師が楽しみ、たくさん笑うこと。

■そんなクラスをつくるために

(1) 担任が話しやすい存在でいる

子どもやクラスの状態を知るためにも、子どもたちとたくさん話をしています。体調や表情の変化、クラスの友達関係について、アンテナを高くしています。そのために、休み時間は子どもたちとなるべく過ごすようにしています。休み時間を教師の休憩や別の仕事の時間にするのはもったいない。ま





た、休み時間は子どもたちが自分でやりたいことを自由にできる時間でもあるのでなるべく時間を奪わないことにも、気を付けています。

(2) 自分のマイナスを話せる環境を整える

マイナスのことを言えることも、大切だと考えています。時と場合によりますが、楽しくないときに「楽しくなかった」と言える雰囲気を大切にしています。これが言えない学級は、本当の自分が素直に出せないことから、人目を気にして過ごすクラスになり、緊張やストレスを生んでしまうように感じます。まずは、教師自ら苦手なことや弱みを見せるようにして、何でも話すことができる雰囲気をつくります。ありのままの自分でいられるクラスの方が、学級経営は格段にしやすくなります。

(3) できたことはみんなで認め合う

クラスの団結力や達成感を味わうために、行事への取組をとても大事にしています。

例えば、行事におけるクラスの目標のつくり方を、子どもたちが評価しやすいようにします。

学習発表会であれば、「お客さんが笑ってくれたら」とか、「話の内容を分かってくれたら」や「誰かが泣いたら」などと具体的に設定することで、目標が達成できたかどうかが、はっきりと分かります。また、子どもたちの反省も、「あれではお客さんは笑わない。聞こえるように、分かりやすいように表現しないと伝わらない」と、改善すべき部分がより明確になります。その結果、評価しやすくなり、達成感も味わいやすくなると考えています。

そして、クラスみんなでできたことがあったときは、「○○マーク」というものを作り、教室に掲示します。できたことに囲まれた教室環境の中で過ごすことは、子どもたちの自己肯定感の向上につながると思います。

(4) 楽しい日々ばかりでは本当の成長はない

その一方で、楽しいことばかりでは成長しないのではないでしょうか。楽しくないこと、苦労すること、うまくいかないことを乗り越えた先に、本当の楽しさや成長を感じることができると思っています。ですから、越えることができそうな小さな壁を用意し、みんなで話し合いながら協力して越えられる経験を積むことができるようにしています。そして、問題解決のときには、なるべく担任の存在を消していくことが大事だと考えています。

さらに、その過程を学級通信に載せるようにしています。「どのようになっていけばよいのか」「このように指導していきたい」なども、意識的に家庭に伝えていきます。そうすることで、自分の学級経営について知ってもらえるだけでなく、子どもたちと保護者の会話のきっかけにもなります。そして、子どもたちが壁を乗り越えることができれば、保護者もきっとクラスの応援団となってくれるでしょう。

■おわりに

自分の欠点をプラスに考える力、プラスに変えようとする努力は、私たち教員にとっても大切です。欠点の多い私でも、いろいろな方々のおかげで、この仕事を楽しくやってくることができました。

しかし、目を輝かせて教職に就いた先生方が、どんどんと笑顔をなくしていくのを見ると、本当に悲しくなります。そんな先生方が、「やっぱりこの仕事、やりがいがあって楽しい!」と思えるよう、私の実践が役に立ってくれることを願っています。



乗り越えた先に、本当の楽しさや成長を感じることができる。

共に学び共に育つ

～子どもとの関わりから学び、共に成長していく～

音更町立
柳町小学校

教諭
小沼　季文



■子どもを理解するために

子どもを理解するためには、「下に立つこと」と言われています。アンダースタンド（理解）とは、下に立つことです。オーバースタンド（高圧的）にならないように心掛け、サイドスタンド（寄り添う）ができるようになったら、アンダースタンドで関わっていくことが必要だと考えています。このことを、これまで養護学校や特別支援学級で出会った子どもたちから学んできました。

■「自分には自分なりの力がある」という感覚を大切に

子どもを支援していく中で「自分には自分なりの力がある」という感覚を子どもが獲得できるようにしていくことが大切だと感じています。そのために、親や教師がその子に気付かせてあげることが必要であり、子ども自身も生活の中の実感としてつかむことが大切です。



「自分には自分なりの力がある」ということは、学習だけではなく、遊びの中や体を動かすことなど、様々な場面で気付くことができます。生活していく中で、みんなから褒められ、認められることが1つでもあると、自分自身の実感につながっていくと考えています。

この「自分なりの力がある」という感覚をもっている子どもと、もっていない子どもでは成長の度合いが違ってきます。

子どもが様々な経験をすることで、何が得意で何が苦手かをつかむことができるようになると、「自分なりの力」を感じることも多くなります。成功体験をたくさん積んでいくことで自信が付き、次へ向かう意欲となります。その結果「自分なりの力」を高めていくことにつながっていきます。

■柳町小学校の特別支援教育では

本校の特別支援教育では、子どもを理解していくために、子どもの目線を大切にしています。さらに、できることに注目しながら、成長に合わせた課題をスモールステップで設定するようにしています。「できた」という成功体験を積み重ねていくことが力となり、その子たちの将来に向けた社会参加や生活自立に結び付くことを目指しています。

今後も、幼稚園、保育園、中学校との連携を大切にしながら、子どもに寄り添った支援に取り組んでいきたいと考えています。

健やかな心と体

～ＩＣＴを活用した健康調査～

■はじめに

養護教諭の保健活動の中で朝の健康調査を行う学校も少なくないと思います。小・中学校や高等学校、そして小規模校・大規模校と様々な校種や規模の学校を経験させていただく中で、各学校における朝の健康調査の必要性も様々でした。

全校生徒20人前後の勇足中学校へ赴任し、３年目を迎えました。現在は、朝の健康調査の在り方を模索しながら、いろいろな方法を試しています。

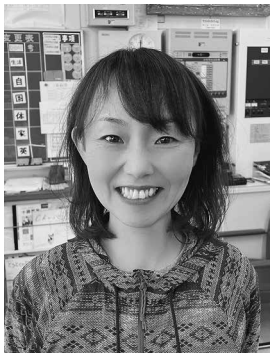
■ＩＣＴを活用した健康調査

１年目は、前年度の方法を引き継ぎました。朝の会で委員会の子どもが、「体の症状」「朝食摂取の有無」を聞き、一覧表に記入しました。

２年目は、新型コロナウイルスの流行に伴い、朝の体温を記入するために個人でのペーパー記入としました。

３年目は、タブレット入力の調査にしました。内容は、朝の体温に「体温が平熱よりも何度高いか」「同居人の健康状態の善しあし」「就寝時間」「起床時間」を追加しました。





本別町立
勇足中学校

養護教諭
川村麻美子

【方法】

① 登校後、２時間目の休み時間までにタブレット端末で入力する。

② 養護教諭が結果を確認後、職員室内の子どもの目に触れない場所に一覧を掲示する。

課題はありますが、タブレット端末を使った方法は、他に比べて便利だと感じています。

■成果と今後の課題

【成果】

① 養護教諭が不在時でも、教頭が確認しプリントアウトすることで、いつも通りの対応ができ、教職員全員に周知することが可能となる。

② 朝の段階で子どもの健康状態を把握でき、体調不良の子どもへの素早い対応が可能となる。

③ 結果が保存できるため、過去のデータをいつでも見ることができる。

④ タブレットを持ち帰ることで、コロナ等による出席停止時に、本人や家庭内の健康状態を把握できる。

【課題】

① 入力時間の確保。

② 検温結果を正確に入力しない子どもへの対応。

③ 入力していない子どもへの声掛け。

何が必要で、何が不要なのかを判断し、子どもに負担なく健康状態を把握できたらと考えています。

■おわりに

これまで「子どもにとって」を最優先に、「まずはやってみる」「課題があれば改良する」という思いで実践してきました。校種や規模によって方法は様々だと感じています。子どもたちが安心して学校生活を送ることができるように、教職員全体で子どもたちの健康状態を把握できる健康調査の方法を今後も考えていきたいと思います。

「報徳のおしえ」を礎とした 未来を創造する子どもたちの育成を目指して ～豊頃町教育研究所の取組～



豊頃町教育研究所
所長　須藤　正博

■はじめに

豊頃町教育研究所は、豊頃町の今日的な教育課題を受け、その解決のための方策及び各校の教育の質向上に資する、実践に有用な教育研究や資料の収集・提供に努めています。

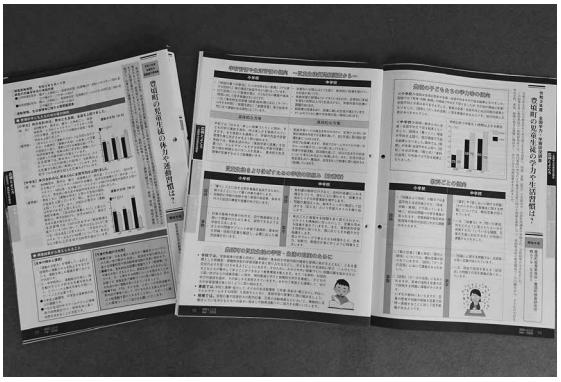
研究所員は、小・中学校の教諭に加え、豊頃町教育委員会教育課長、教育推進員の9名で構成されています。子どもたちにとって「報徳のおしえ」が生きる上での基盤となるよう、ふるさと豊頃町に対する誇りと愛着心を育む郷土学習や教育環境づくりを推進しています。

■近年の取組について

⑴　学力・体力向上に関わる研究

毎年、本研究所では全国学力・学習状況調査と全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果を受け、町内の子どもたちの課題を精査しています。さらに、その解決の方策等を豊頃町広報紙に掲載し、町内の教員だけでなく、広く保護者や地域住民とも共有しています。

また、毎年4月に「家庭学習の手引き」を町内小・中学校の保護者に配布し、家庭内での学習の指針となるようにしています。手引きは、年度ごとに内容を見直し、改訂版を作成しています。また、小学校版と中学校版の2種類を発行し、発達段階に応じた内容にしています。

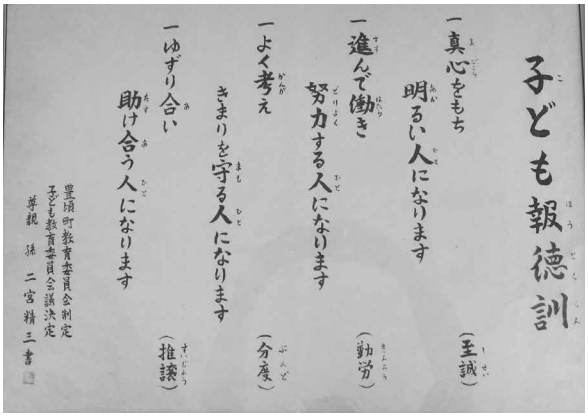


学力と体力に関わる調査結果と考察
（豊頃町広報誌）

⑵　「報徳のおしえ」が生きる授業支援

豊頃町は、明治中期に開拓者として入植した二宮尊親が伝えた報徳に関わるおしえが脈々と受け継がれ、昭和42年に制定された町民憲章にもうたわれており、豊頃の町づくり・人づくりの礎となっています。平成23年には「子ども報徳訓」が制定され、町内小・中学校の全教室に掲げており、義務教育9年間を見通した道徳的価値の形成に取り組んでいます。

研究所では、豊頃町学校教育振興会とも連携し、「報徳のおしえ」に関わる公開授業の実施や、授業づくりの資料提供に努めてきました。ここ2年間は新型コロナウイルスの影響で主立った事業が滞っていましたが、令和4年度は、町内教職員を対象に「報徳のおしえ」をもう一度基礎から学ぶための講演会を実施しました。講師に、豊頃町で過去に生涯学習アドバイザーを務め、冊子「報徳のおしえQ＆A」



教室に掲げられている「子ども報徳訓」

を執筆された笠松信一氏を迎え、二宮金治郎の生涯から報徳の考え方までを体系的に学ぶことができました。さらに、授業実践に生きる例示にも触れることができ、非常に実践的な研修の機会となりました。

講演会以外にも、過去の「報徳のおしえ」に関わる授業実践の指導案や補充プリントを収集し、データとして各校に配付することで継続した取組になるよう活動しています。

(3) ＩＣＴ活用に関わる研究

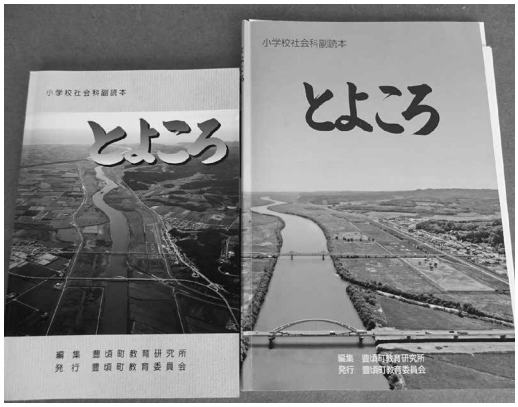
豊頃町では教育への手厚い予算配分により、ＧＩＧＡスクール構想に先んじて、町内小・中学校にタブレット端末が配備されました。また、豊頃小学校では北海道教育委員会指定事業である「プログラミング教育事業研究実践校」として、北海道全体を牽引する事業を展開してきました。その成果として、ＩＣＴの活用が進み、端末を学習目標達成のためのツールとして活用することが定着しています。昨年度は指定事業の一環として実施された「プログラミング教育公開授業」に研究所員も参加し、研鑽に努めました。現在は、端末で有効活用できるアプリの「ロイロノート」や「スマイルネクスト」の実践例を収集し、町内の全教職員が授業で生かせる資料づくりを計画しています。



プログラミングを取り入れた授業の様子

(4) 副読本「とよころ」の発刊

学習指導要領や教科書の改訂に伴い、研究所で小学生の３・４年生向けに社会科副読本を作成しています。令和元年度から原稿の作成を始め、協力員とともに、令和２年度末に発刊しました。原稿はデータ化することで、次回更新する際の負担を減らすことができます。また、副読本を授業で使用する学年からの評価を蓄積し、次回の改訂に生かしていきます。今後は子どもが使用する端末でも見ることができるようにすることが課題です。



副読本「とよころ」

(5) その他の事業

研究所の取組について透明化を図り、周知していくことで、より協働体制が生まれることをねらい、「所報」を発行し、町内の全教職員や教育委員会などの教育関係機関に配布しています。また、年度末には「豊頃町の教育」という研究紀要を発刊し、町内各校の共同研究の成果と課題や豊頃町教育研究大会の内容をまとめています。さらに、研究所員が所属校の教職員から研究所への要望等を吸い上げたり、講演会でアンケートを実施したりする中で、今後の取組の方向性を見極め、豊頃町の教育の質向上に貢献しています。



研究紀要「豊頃町の教育」

■今後の取組

社会はますます先行き不透明な状況が続きます。そんな時代を自ら切り拓く資質・能力を子どもが身に付けるために様々な取組がありますが、豊頃町には「報徳のおしえ」という礎があります。町としての強みを生かし、子どもたちがふるさと豊頃を愛しながら成長できる支援を、全研究所員と豊頃町内の教職員で協働しながら今後も進めていきます。



令和４年度
十勝管内教育研究所
連絡協議会

共同研究

「深い学び」に向かう子どもを育む研究

～ＩＣＴを生かした、パフォーマンス課題を位置付けた単元計画を通して～

パフォーマンス課題を位置付けた単元計画とは

単元で期待する「深い学び」に向かう子どもの姿、目標と観点別評価規準、単元で働かせる見方･考え方、パフォーマンス課題とルーブリック、ＩＣＴを生かした場面の設定などを明確にし、指導に生かすための単元計画。

パフォーマンス課題

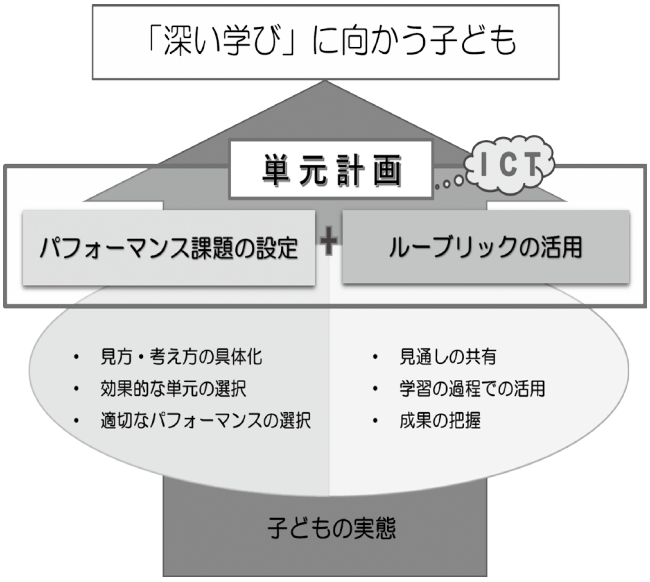
・各教科による見方・考え方を働かせる課題
・習得した知識及び技能を活用したり、応用したりする課題
・「思考・判断・表現」を評価するための課題

ルーブリック

・パフォーマンス課題を評価するときに用いる数レベル程度の評価基準表
・単元や内容の導入時など早い段階に提示し、子どもと共有するもの
・子どもが学習の過程や終末において、成果の把握に役立てるもの

研究の仮説

パフォーマンス課題とルーブリックを位置付けた単元計画にＩＣＴを生かすことで、「深い学び」に向かう子どもを育むことができるだろう。



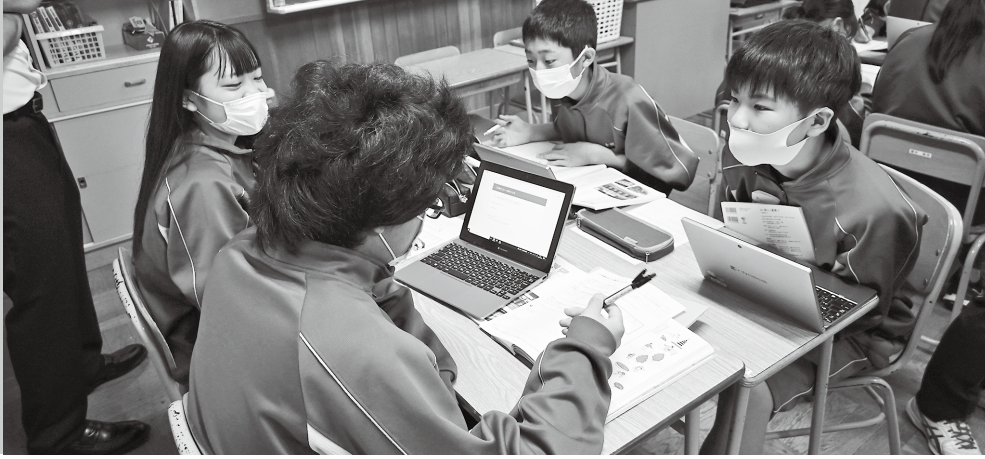
研究組織

グループ	A グループ	B グループ
学年・教科	小学校第３学年・理科	中学校第３学年・国語科
推進幹事	大草　恵輔（芽室南小）	山田　征洋（陸別中）
推進副幹事	長谷川知英（広陽小）	兒玉　真一（幕別中）
授業者	政野　里歩（上士幌小）	佐藤　悠樹（中札内中）
共同研究員	日水　直樹（音更小）市原　秀樹（新得小） 吉田　哲朗（清水小）岩田　浩平（更別小） 齊藤　織斗（大樹小）森岡　達昭（広尾小） 中田　和行（池田小）	鈴木日向子（士幌町中央中）梅原　翔太（鹿追中） 関谷昂二郎（豊頃中）松林　一彦（浦幌中） 乾　克彦（勇足中）山田　優里（足寄中）

本研究では、各グループ2回の授業実践を通して、研究を進めています。

令和４年度
十勝教育研究所

協力員研究



子どもたちに自他を認め合う心を育む研究

～ＩＣＴを活用した「考え、議論する」道徳科の授業を通して～

ＩＣＴを活用した「考え、議論する道徳」の授業とは

素早い情報の可視化や共有化など、１人１台端末等のＩＣＴを効果的に活用しながら、道徳的価値や事象を子どもが主体的に考え、対話的な学びを通して、自己の生き方・人間としての生き方についての考えを深める道徳を目指す授業。

研究の仮説

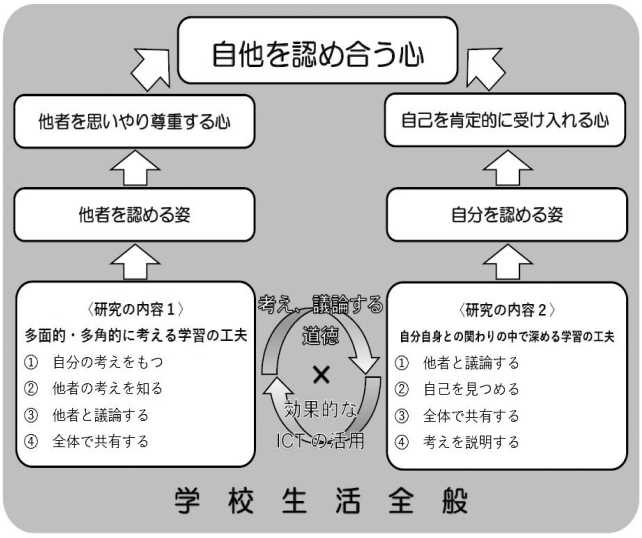
ＩＣＴを活用した「考え、議論する道徳」の授業を通して、多面的･多角的に捉えたり、自分自身との関わりの中で深めたりすることで、自他を認め合う心が育まれるだろう。

多面的・多角的に考える学習の工夫

「自分ならどうするか」という観点から道徳的価値と向き合うとともに、自分とは異なる意見をもつ他者と議論することを通して、道徳的価値を多面的・多角的に考える学習。

自分自身との関わりの中で深める学習の工夫

他者との合意形成や具体的な解決策を得ること自体が目的ではなく、多面的・多角的な思考を通じて、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深める学習。





研究協力員　士幌町立士幌町中央中学校
教諭　祢津　豊





研究協力員　幕別町立札内南小学校
教諭　金谷　智皓

管内の小･中学校各1校の協力を得て、協力員を委嘱し、授業実践を通した研究を進めています。

研究主題

「深い学び」に向かう子どもを育む研究

～ＩＣＴを生かした、パフォーマンス課題を位置付けた単元計画を通して～

中札内村立中札内中学校 第３学年国語科『async-同期しないこと』『問いかける言葉』授業者 佐藤　悠樹

授業実践１	筆者の主張とその根拠、本文中のキーワードに着目しながら本文を読む。（1/7時間）

パフォーマンス課題（ワークシート）
これから高校進学や就職など社会に飛び立つ皆さんは、社会や人とどのように関わっていきますか。２つの教材から得た知識や「不寛容」などの言葉から得たそれぞれの筆者のものの見方や考え方を踏まえて、社会や人との関わり方について、自分の考えをまとめましょう。

ルーブリック	
A	Bに加え、ものの見方や考え方に対して共感できる点や疑問に思う点、賛同できない点など、自己の経験（見たり聞いたりした内容も含む）を踏まえ論理的な文章にまとめている。
B	２つの論説で捉えた筆者の考えを比較し、共通点・相違点をまとめた上で、社会や人との関わり方について自分の考えをまとめている。
C	Bの基準を満たしていない（主張と自分の意見に矛盾があるなど）。

探究する

※　この前に、見通す場面が行われています。

○　**本文『async―同期しないこと』『問いかける言葉』を通読する。**

○　**筆者の考えの中心となる語句や社会との関わりに関する語句を抜き出す。**

Mentimeterを使い、課題を可視化する。その後、「不寛容」や「同期」とはどういう意味なのか、交流しながら考える。



「同期」って音を合わせること？他の人に合せること？「寛容」は？

「寛容」は心が広く、人の考えを受け入れることだから…。

見通す（本時→単元）

○　**パフォーマンス課題とルーブリックを確認する。**

今回のパフォーマンス課題では、「筆者の考えを比較して」というのがＢ評価になりますが、Ａ評価になるためには「共感できる点や疑問に思う点」など、自分の経験を踏まえて論理的な文章に…。





筆者の考えに対して、自分の考えを整理しながら読み進めるといいんだな。

※　この後、振り返る時間へと続きます。

令和４年度
十勝管内教育研究所連絡協議会

共同研究

上士幌町立上士幌小学校　第３学年理科　『ものの重さ』　　授業者　政野　里歩

授業実践１	形を変えた粘土は、どちらの方が重いか考える。（１/７時間）

パフォーマンス課題（ワークシート）

B・C・Dの重さは、Aの重さにくらべてどうでしょうか。その理由も答えましょう。

A



ボールを持って体重計の上に立っている。

B



ボールを持って体重計の上にしゃがんでいる。

C



ボールを体重計の上に置いて立っている。

D



メディシンボールを持って体重計の上に立っている。

ルーブリック

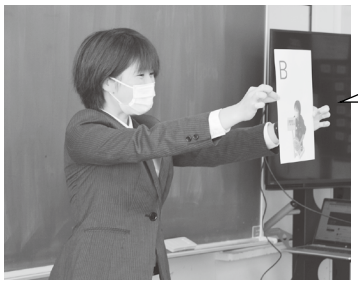
A	実験写真の同じところや違うところに注目して、実験結果や結論(「形を変えても、ものの重さはかわらない」や「体積が同じでも、種類がちがうと、ものの重さはちがう」)を根拠にしながら、B・C・Dの重さはAの重さに比べてどうか説明している。
B	実験結果や結論を根拠にしながら、B・C・Dの重さはAの重さに比べてどうか説明している。
C	Bの基準を満たしていない（当てずっぽうや、結論を根拠にしていないなど）。

見通す（本時→単元）

○　**「ものの重さクイズ」を基にして、単元で学習する内容を想起する。**

○　**パフォーマンス課題を確認する。**

Aの写真とB・C・Dの写真を比較し、違いに気付いたり、重さの比較を予想したりする。



Aの写真と比べてどうかな。

しゃがんでいる。

Bの方が重いと思う！

同じじゃないかな。



○　**ルーブリックを確認しながら、単元の見通しをもつ。**

【ルーブリック】

◎（A）…写真の同じところや違うところに注目して、単元で学習した実験の結果や結論を基に答える。
○（B）…単元で学習した実験の結果や結論を基に答える。
△（C）…当てずっぽうで答える。

実験で理由が分かるんだな。



※　この後、振り返る時間へと続きます。

研究主題

子どもたちに自他を認め合う心を育む研究

～ＩＣＴを活用した「考え、議論する」道徳科の授業を通して～

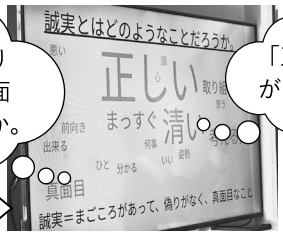
幕別町立札内南小学校　第６学年 授業者　金谷　智皓　教諭 研究の内容２　自分自身との関わりで深める学習の工夫	主 題 名　「20　明るく生きる」 内容項目　A-(2)　正直、誠実 教 材 名　「手品師」

導入



みんなは「誠実」とはどんなことだと思っているの？

「真心」「偽りがない」「真面目」ってことか。



「正しい」が多いね。

ＩＣＴ

1　「誠実」とはどのようなことか？事前アンケートの結果を知る

課題：誠実な行動をするときには、どのようなことを大切にしたらよいだろうか。

展開

手品師は腕がいいのに、貧しいんだね…。



大劇場のショーに出ることより男の子との約束を選んだのか。

2　教材文を読んで、あらすじを知る

【研究との関わり】
他者と議論する

「考え、議論する」

やっぱり、手品師のように、男の子との約束を守る方が誠実だよ！



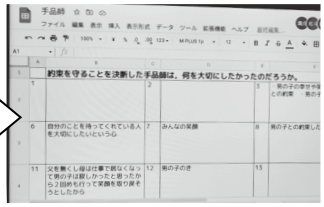
でも、自分の夢だった大劇場を諦めることは誠実なの？

3　「男の子との約束」「大劇場に行く」のどちらを選ぶか考え、議論する

【研究との関わり】
自己を見つめる



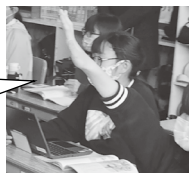
ＩＣＴ



4　約束を守った手品師は何を大切にしたかったのかを考え、全体で交流し共有する

【研究との関わり】
全体で共有する

自分の夢も大切だけど、手品師は男の子の笑顔を大切にしたかったんだと思います。



5　議論してきたことを基に、「誠実」についての考えを深め、説明し合う

【研究との関わり】
考えを説明する



誠実であるためには、自分自身が納得できるかどうかや、後悔しないように考えることが大切だと思います。

終末

自分を認める姿

自己を肯定的に受け入れる心

学校生活全般を通して

め　合　う　心

令和４年度
十勝教育研究所

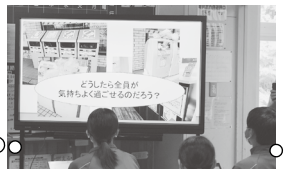
協力員研究

士幌町立士幌町中央中学校　第１学年 授業者　祢津　　豊　教諭 研究の内容１　多面的・多角的に考える学習の工夫	主 題 名 「12　だれもが気持ちよく過ごせる社会を目指して」 内容項目　C-⑽　遵法精神、公徳心 教 材 名 「ごみ箱をもっと増やして」

導入

1　コンビニのゴミ箱が店内に移動することで困ることを考える

家庭ごみを捨てる人がいると、店の人は困るよなぁ。



お客さんにとっては、外にごみ箱がある方が便利だよ。

課題：誰もが気持ちよく生活するために、心掛けることは何だろう。

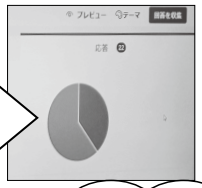
展開

2　教材文の最初の投稿文を読み、自分は賛成・反対か考える

なるほど。ごみ箱は増やすべきだ。賛成にしよう。



ＩＣＴ



【研究との関わり】
自分の考えをもつ

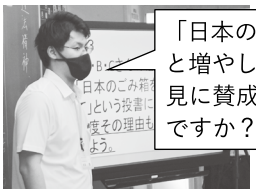
3　他の３つの投稿文を読み、それぞれの意見の主張をまとめる

Ａの投稿はごみ箱設置に賛成だけど、ＢとＣはどう？



立場は同じであっても、理由は違うんだな。

4　ごみ箱を増やすことについて、中心発問で主題に迫る



「日本のゴミ箱をもっと増やして」という意見に賛成ですか？反対ですか？



ごみ箱が増えれば、ポイ捨ても減るから賛成。でもなぁ…。

「考え、議論する」

5　自分の立場を明確にし、グループで話し合い、全体で交流する

いつもごみ袋があるわけではないから、ごみ箱を増やしてほしい！



でもさぁ、30mごとにごみ箱のある街が、きれいな街だと言えるの？

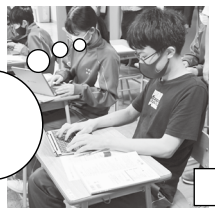
【研究との関わり】
他者の考えを知る

【研究との関わり】
他者と議論する

終末

6　学習を振り返り、よりよい社会にするために大切な考えを共有する

よりよい社会にするために大切な考え方とは…。



ＩＣＴ



【研究との関わり】
全体で共有する

自分を認める姿 → 他者を思いやり尊重する心

学校生活全般を通して

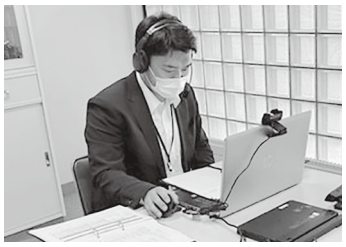
自　他　を　認

7/29（金）　北海道教育研究所連盟夏季所員研修会

全道の教育研究所所員を対象に、北海道教育研究所連盟主催による研修会が行われました。

今年度は、学習評価及びＩＣＴを活用した授業改善について学ぶことを通し、令和の時代に求められる学習・評価観について理解を深め、所員等の研修講座における企画力や助言力の向上に資することを目的として行われました。

十勝教育研究所からは、柴田所員、白澤所員の２名が参加しました。オンライン会議システム（Zoom）による研修会でしたが、全道各地の研究所の所員との協議や演習を通して研修を深めることができました。



8/26（金）　道東地区教育研究所所員研修会 兼　十勝管内教育研究所所員研修会

道東地区における各教育研究所の今日的課題と役割を明確にし、併せて相互の研究成果を交流して研究所員の力量を高めることを趣旨として、毎年行われています。

今年度は、十勝教育研究所が主管となり、十勝管内教育研究所所員研修会と兼ねて行われました。オンライン会議システム（Zoom）による開催でしたが、約 200 名の方々の参加がありました。分科会は、所長部会と所員部会に分かれて行われました。所長部会では、各地区の研究所の活動が紹介されました。授業改善に関するものや不登校など、発表内容は多岐に渡り、多くのことを学ぶことができました。



8/26（金）　教育講演会

十勝教育研究所主催による「令和４年度教育講演会」がオンライン形式で開催されました。京都大学大学院教授・西岡加名恵氏を講師としてお招きし、「『資質･能力』を育成するパフォーマンス評価」という演題で講演をしていただきました。

パフォーマンス課題を作る上で適切な単元を選ぶことや、学習指導要領における「見方・考え方」に当たる「本質的な問い」を明確にすることの必要性、パフォーマンス課題の作成手順など、実践例を基に説明してくださいました。

単元を通した学習課題の設定や評価の在り方など、今後の教育実践に生かすことのできる内容が数多く、実りのある講演会となりました。



10/28（金）　全国教育研究所協議会（北海道大会）北海道教育研究所連盟研究発表大会（札幌大会）

全国教育研究所連盟の加盟機関が直面する教育上の課題について、実践研究等の成果を基に研究協議を行い、学校教育の改善・充実に向けて、加盟機関における学校支援機能の向上を図ることを目的として行われました。

基調講演では、独立行政法人教職員支援機構の荒瀬克己理事長を講師に、「子どもを主語にする学校をつくるために」について、主体的に学習に取り組む態度の評価等の説明をしていただきました。

午後からは、２つの分科会に分かれ、提言発表及び質疑応答を行い、活発な議論が行われました。



令和４年度　十勝教育研究所

研究発表大会

今日的な教育課題について、十勝教育研究所が今年度調査・研究した成果を発表し、実践交流を通して研究成果を広げ、今後の管内教育の充実発展に資することを目指しています。



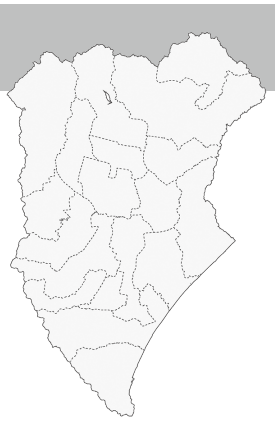
日時　令和5年 2月7日(火)
14：40～16：30

会場　オンライン開催（Zoom予定）

主　催　十勝教育研究所　（問合せ先 0155-56-2331）
共　催　十勝管内教育研究所連絡協議会
後　援　北海道教育庁十勝教育局　十勝管内教育委員会連絡協議会　十勝小・中校長会　帯広市校長会

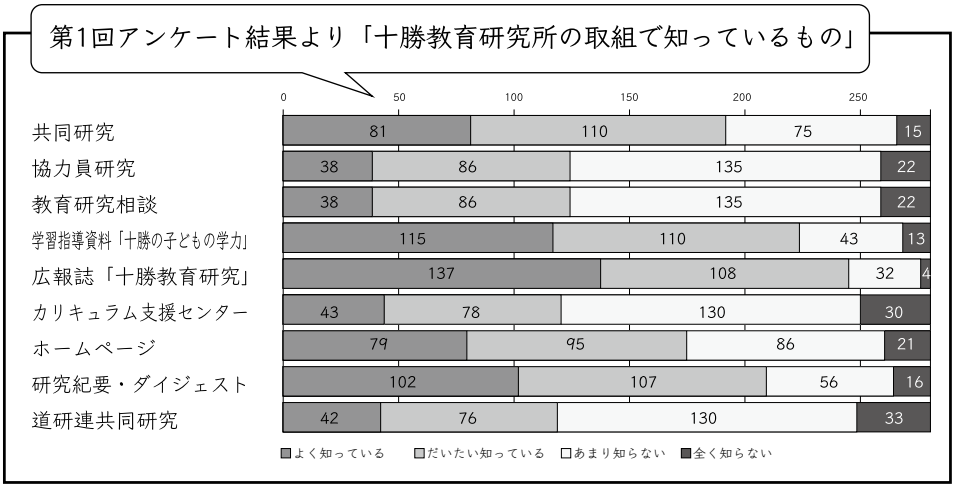
エッ！
そうなの？

十勝管内小・中学校意識調査
数字で見る十勝の教育



十勝教育研究所では新たな取組として、十勝管内の教育課題や教育情報・各学校の状況等、様々なテーマに関する調査を行い、その結果を広報誌やHPで公表し、情報提供を行います。

第1回アンケート結果より「十勝教育研究所の取組で知っているもの」



第１回目は、昨年11月に実施した「十勝教育研究所の取組について～活用実態と要望等の調査～」の結果を公開します。詳細は、右下のＱＲコードまたは十勝教育研究所のＨＰからご覧ください。

編集後記

担当から

高校野球、夏の甲子園で東北勢初優勝を果たした宮城の仙台育英高校。「青春って、すごく密なので・・・」チームを指揮し優勝に導いた須江航監督のインタビューに感激したという声が多く聞かれました。コロナ禍によって、この２年間、各地では密の回避が求められました。子どもたちの多くが仲間と分かち合う貴重な機会を失っていることをこの夏、思い出した人も多かったのではないでしょうか。

今号の特集は、「ＩＣＴの効果的な活用方法」でした。教職員の業務や、負担感を少しでも軽減できるような、校務効率化に関わる情報や実践例を掲載しました。掲載したことが、何か１つでもお役に立てば幸いです。

ご多用中にも関わらず、原稿をお寄せいただきました先生方や関係者の皆様に感謝いたします。十勝教育研究所は、今後も先生方のお役に立てるよう、広報誌やＨＰを通して様々な教育情報を提供するとともに、授業実践に役立つ研究を進めてまいります。

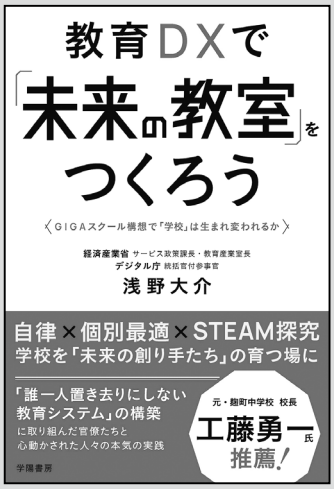
次号予告

特集
小学校高学年における教科担任制について

小学校高学年からの教科担任制が本格的に導入されることになりました。各地域・各学校の実情に応じた取組が可能になるよう教科担任制の主な指導形態や取組事例などを中心に特集します。

◇巻頭言　◇教育現場への期待　◇退職教職員挨拶
◇わたしの授業実践　◇わたしの学級経営　◇共に学び共に育つ
◇健やかな心と体　◇日本人学校より　◇教育情報
◇日々徒然　◇学校めぐり

担当のオススメ本



これから子どもたちが生きていく社会で求められる力を育てるために、どのような教育を実現していくべきか。各国の教育改革やＯＥＣＤが発表しているこれからの教育を見据えつつ、実現可能な「未来の教室」の在り方を可視化する一冊です。

「教育DXで『未来の教室』をつくろう」
著/浅野　大介
出版社/学陽書房

十勝教育研究

令和４年11月発行

発行所　十勝教育研究所
所長　山田　洋

089－0531
中川郡幕別町札内暁町２９０番地の２
TEL　０１５５－５６－２３３１
FAX　０１５５－５６－４２６０
Email　staff@tokyoken.net

印刷所　株式会社アド・プリント

日々徒然

何気ない出来事に心を寄せて

日本の当たり前がペルーでは…

鹿追町立鹿追小学校
教諭　長屋裕美



昨年度まで、ペルーのリマ日本人学校に勤務し、小・中学生と過ごした。子どもたちの言語環境は様々で、日本語だけを話す子、ペルーの公用語であるスペイン語を日本語と同じくらい話す子、スペイン語の方が得意な子など、日本人学校の中でも、それぞれの主となる言語が異なっていた。そんな子どもたちと日本の教科書で学習する中で、たくさんの気付きがあった。

算数の文章問題に、「コンビニ」「灯油」など日本人には身近な言葉が出てきても通じない。「日本のコンビニとは…」「灯油とは…」という説明から始めることになるので、「今、何を学習しているんだっけ?」となってしまう。

理科の「太陽の動き」の学習では、教科書の「東から昇った太陽が南を通って西に沈む」という当然の説明も、南半球にあるペルーでは太陽は南中しないため、行ってみて初めて違うことに気付いた。

社会科の「我が国の食料生産」の学習では、日本の食料自給率の低さが課題となっていることを扱ったが、ペルーでは国産の食料があふれている。実際の生活とのズレが大きい。

道徳では、危ないことをしている子どもがいる公園のイラストを見た子どもたちの発言に驚いた。それは、「子どもだけで公園で遊んでいるのが危ない」だった。犯罪率が高いペルーでは、子どもだけで行動することはない。登下校や公園遊びも保護者同伴なので、その子たちの言うとおりだ。

同じ日本の子どもたちを目の前にしていても、国が違えば、日本の当たり前が当たり前ではないこと、言語を学ぶことはその国の文化を学ぶことだと実感した。文化の違いがあっても、日本人学校の子どもたちはお互いの言語と文化を認め合って楽しく過ごしている。

人との出会いと分岐点

幕別町立札内中学校
教諭　富谷千城



36年前の春、大学は卒業できたものの教員採用試験は不合格。一人東京に残り、試験勉強をしながら建設作業員として働いた。

しかし、二度目の試験も不合格。会社役員から「現場監督として会社へ」と誘われたが、教師になることを諦められなかった。

翌年5月、作業員を辞めて札幌へ移り、勉強と就職活動の日々を過ごした。8月頃、職も決まらず貯金も底を突き、親に頭を下げて帯広へ帰郷。民間会社でインストラクターのアルバイトを始めた。支配人から「正社員として会社へ」と誘われるも断っていたが、三度目の不合格でついに教師の夢を諦め、正社員となった。

それから2年が過ぎた。時はバブル期。会社も上向きになり、新たな設備や企画などを支配人と共に計画した。そして、社長へ投資の交渉を数回したが決裂。理由は、開園間近だったテーマパークへの出資のためだった。結果、尊敬する支配人は退社することになり、私もすぐに後を追って会社を去った。

その後、教師になりたいという願望が再燃し、小学校臨時教員として職に就き、試験勉強も再開した。その年、四度目の試験でやっと合格。念願の中学校体育教師になることができた。

数年後、バブルは崩壊した。あのテーマパークも閉鎖し、勤めていた会社も倒れた。

22歳、真夏の昼休み。汚れた作業服にヘルメット。高層ビルの屋上で問題集を片手に、「いつか教師になってやる」と誓ったあの日の情景が、今でも目に浮かぶ。今があるのも、過去の職や人との出会いのおかげである。

さて、もうすぐ次の分岐点が目前に迫っている。



【インターンシップ発表会】

中高一貫教育のキャリア学習では、１年生はインターンシップ発表会、２年生は語り場、３年生は進路発表会と、高校生から直接話を聞いたり質問したりして、進路について学びを深めています。

学校めぐり

広尾町立広尾中学校

■生徒数 137名（9学級） ■教職員数16名

「広尾の子どもは広尾で育てる」を合い言葉に、平成18年度より広尾高校と中高一貫教育をスタートさせ、平成30年度に学校運営協議会が設置されました。また、広尾町教育研究所と連携して、学力向上策、タブレット端末の効果的な利活用、ふるさと学習の系統化などは、小・中学校で進めています。特に、ふるさと学習は、地域の資源「ヒト・モノ・コト」を最大限に生かして、子どもの自己肯定感の向上や挑戦する心の育成を目指しています。



【野外学習　地域でウォークラリー】

１年生のふるさと学習では、「地域を知る」をテーマに、公共施設、海や川などを訪れ、地域の文化や歴史を学んでいます。



【学力向上　小・中教科別研修会】

教科ごとに結果を分析し、授業改善や家庭学習の取組方法について、小・中学校の教員が検討を行っています。



【夏休みパワーアップルーム】

中高一貫教育の１つとして、学習面では高校の先生による出前授業、長期休業中の高校生による学習サポートなどを行っています。